



Title	「若手公衆衛生医師から」
Author(s)	津田, 侑子
Citation	大阪公衆衛生. 2016, 87, p. 21-21
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/78643">https://hdl.handle.net/11094/78643</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

### 「若手公衆衛生医師から」

津田 侑子

大阪市保健所感染症対策課 兼 大正区保健福祉センター

私は、大阪市保健所に勤務して3年になります。大阪市保健所の公衆衛生医師は、チーム制・エリア制で配属され、私は現在、チームとしては、保健所感染症対策課で感染症チームの一員として、結核やその他の感染症対策に携わっています。またエリアとしては、大正区保健福祉センターを兼務し、西部エリアのメンバーとして仕事をしています。保健所と保健福祉センターを兼務することで、感染症領域だけでなく、公衆衛生医師として幅広い経験ができますし、このチーム制・エリア制により、それぞれのリーダー医師や先輩医師に相談しながら日々の業務に取り組むことができ、非常に心強く感じています。また、保健所に勤務するようになり、医療職以外も含めさまざまな職種スタッフと連携して仕事をするようになり、いろいろな仕事や考え方に触れ、自分自身の視野も広がったと感じています。

私は医学部卒業後、比較的早い時期に、公衆衛生の道を選択し、臨床研修、大学院を経て、大阪市保健所で勤務しています。一般的に公衆衛生という分野は認知度が高くなく、「公衆衛生って何するんですか？」と尋ねられることは多いですし、その度に公衆衛生という分野や保健所の役割について説明し、理解を得る、ということは珍しいことではありません。そして、公衆衛生という道へ進むことは、医師の中でも比較的珍しいキャリア選択であり、また、やりがいを実感することや結果が見えにくい仕事でもあります。

私が、「公衆衛生」という分野や仕事に強く興味を持つようになったのは、学生の頃に、ネパールの山村で結核対策を長く続けられた、故岩村昇先生の「ネパールの青い空」という本を読んだことでした。もともと、途上国で医療活動をしたく

て医師を志したこともあり、「公衆衛生」と「結核対策」は、その後も常に自分の中のキーワードとなり、今につながっています。

私自身は、「公衆衛生の仕事って楽しいですか？」と問われれば、今でこそ「Yes」と答えることができますが、迷いや不安が全くなかったわけではありません。しかし、日々の業務の中で、公衆衛生ならではのやりがいやおもしろみを実感する場面はたくさんありますし、これまでさまざまな形で公衆衛生に携わる方々の姿に励まされることは多々あり、仕事のモチベーションにもつながってきました。ネットワークづくりというのは、業務そのものに対してはもちろんですが、業務へのモチベーションに対しても非常に重要だと感じています。

『公衆衛生は、共同社会の組織的な努力を通じて、疾病を予防し、寿命を延長し、身体的・精神的健康と能率の増進をはかる科学・技術である』（C.E.A. Winslow; WHO, 1949）という定義がありますが、地域社会や組織の協働によって、現状・データ分析の結果に血を通わせた生きた対策へとつなげ、それが地域社会や個人へ還元されていく、その公衆衛生の本質を忘れずに仕事をしていきたいと思います。公衆衛生といっても、さまざまな現場や仕事があります。現状では、決まった道やゴールドスタンダードはなく、最終的には自分の姿勢が問われるのではないかと感じています。

まだまだ未熟で学ぶことが多い私ですが、個人と集団、臨床と行政をつなぐバランス感覚と、人と地域を大切に思う気持ちを持って、地域の公衆衛生課題の解決のために、地域のみなさまや公衆衛生の現場で働くスタッフと共に学び成長していきたいな、と思っています